福 井 城 跡
山 里 口 御 門 地 点

現 地 説 明 会 資 料

平成 27 年 7 月 26 日（日）

福　井　県

調査の目的

福井県では平成25年度より山里口御門の復元事業を進めています。門の復元工事に先立ち、ゆがみや破損が目立つ復元予定地の石垣の解体・積み直しが必要となりました。

そこで、石垣の現状を記録に留めるとともに、その築造工程や修復状況を明らかにするため、石垣の解体と発掘調査を同時に行っております（第１・２・５図）。

調査の方法

調査は今年の２月末から８月末までの期間で、以下の手順に沿って進めています。

１ 足場設置・石材洗浄	足場を組んだ後、高圧洗浄機で石材表面の汚れを落とす。
２ 墨打ち・番号付け	石材表面に50㎝間隔の線を入れ、番号を記入する。
３ トレンチ掘削	盛土や裏込石の状況を確認するため、溝状に掘削を行う。
４ 盛土・裏込石除去	
５ 写真測量	石垣石材や裏込石の平面図の測量を行う。
６ 石垣解体	石材上面に番号を記入し、石材の据え付け角度を計測した後、クレーン車で石材をに降ろす。
７ 石材調書作成	石材の寸法および刻印や矢穴等の加工痕跡の記録を取る。

以上の作業を北地区と南地区の石垣で交互に行い、解体を進めています。また、盛土や裏込石は復元時に再利用するため、袋詰めして保管しています。

門の構造

山里口御門は、福井城本丸の西北に位置し、現在の中央公園にあった「山里」曲輪から「御廊下橋」を渡り、本丸へと入る場所にあたります（第１・２図）。門は「枡形門」というタイプのもので、御廊下橋から来ると、石垣にはさまれた屋根付きの平屋の門（一之門）があり、そこを入り左に折れると石垣にはさまれた二階建ての門（二之門）があるという構造になっています（第３・４図）。二之門の北半分は石垣積みの櫓台（やぐらだい）に載り、南半分は通路に据えた礎石に載る柱で支えられていました。二階部分は普段は倉庫や詰所として使われましたが、戦時には門を破ろうとする敵兵を攻撃する場となりました。

平成25年には、門の構造を調べる目的で通路と櫓台の部分の発掘調査を行い、礎石や暗渠・側溝などを発見しました（『第29回福井県発掘調査報告会資料』）。

上面の遺構

南地区の石垣Ｆ・Ｇ面上端の石材には、土塀の柱を据えたホゾ穴が1.5m間隔（五尺）で残っています（第８図）。今回の調査では、このホゾ穴から 2.0m内寄りの位置で、石材を円形に並べた遺構を一か所検出しました（第６図・石囲１）。土塀が倒れないように設けた控柱を据えた痕跡と考えていますが、他のホゾ穴に対応する位置では見つかりませんでした。また、この遺構の近くで、石材を一列に並べた遺構を一か所検出しました（石列１）。

北地区の石垣Ａ面上端の石材にも、土塀の柱を据えたホゾ穴がありますが、間隔はまちまちです。また、石垣Ｅ面の上端の石材にはホゾ穴が見られません。天守台周辺の石垣は近現代に、上端付近が積み直されており、原状をとどめていません。今回の調査でも、ホゾ穴のある石材が横倒しで積まれているのを確認しています（第７図）。

石垣の築造年代

城下絵図の記載から、この門は慶長年間（1596～1615）の福井城築城当初よりあったことが確認できます。しかし、寛文９年（1669）の大火（寛文大火）によって一度焼失し、その後再建されたことが記録に残っています。修復工事の担当奉行の決算書には、その周囲の石垣の補修も行われたと記されています。

今回の解体調査範囲内では、門の二階部分を載せる櫓台（やぐらだい）の石垣Ｂ面・Ｃ面が、他の石垣より新しい特徴を持っていました。石垣石材の表面に見える部分（小口面）が、きれいな方形に加工され、となり合う石材との間にすきまがありませんでした。裏込石には火を受けて褐色に変色した石材が含まれており、この櫓台の石垣が大火後に積み直されたことを示しています（第 11 図）。なお、櫓台のＤ面は門の二階部分に登るための雁木（がんぎ）と呼ばれる石段で、ホゾ穴のある石材が不規則に並び、裏込土に近代の遺物が多く含まれることから、近代に積み直されたと考えています。

北地区の石垣Ｅ面は、上から６～７段目までの裏込石が丸い河原石で、それより下が角ばった山石になっていました。これより低い位置の石垣には火を受けて変色したものがあり、この部分を境にして上の部分が積み直されたと考えています。石垣Ａ面については、裏込石に山石が使われており、積み直した証拠は見つかりませんでした。

南地区の石垣Ｆ面の裏込石は河原石で、石垣Ｇ・Ｈ面の裏込石は山石です（第 10 図）。河原石は足羽川などで採取されたもので、山石は石垣と同じ笏谷石で、足羽山の採掘現場で出たクズ石を利用したものと考えています。南地区では、上から 10 段目以下では、裏込内に近世の遺物が含まれていないため、ここから下は積み直されていないと想定していますが、今後の解体調査の中で確証を得たいと考えています。

今回の調査によって、石垣表面に何らかの目的で線刻を付けていることがわかりました（第 14 図）。石垣の下から上まで、とびとびに一直線上に線刻が残っていました。線刻の間隔は不均一で、櫓台や南地区の石垣Ｇ面には、線刻がありませんでした。大坂城では、刻印との対応から、担当した大名の工区の境界を示すものとされています。福井城では、どのような目的で線刻が付けられたのか、今後検討していきたいと思います。

出土遺物

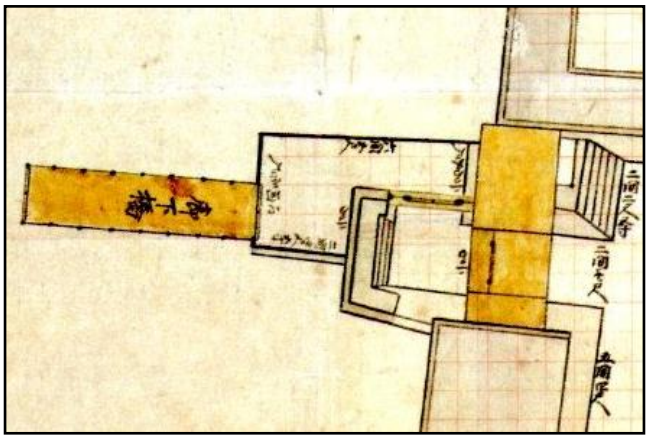
笏谷石製瓦と粘土瓦が出土しています。粘土瓦は釉薬を掛けない燻し瓦（いぶしがわら）が多く、釉薬を掛ける赤瓦（あかがわら）は少量です。陶磁器の出土はごくわずかです。

今回の出土遺物の中で特筆すべきものは、笏谷石製の腰板石（こしいたいし）です。これは、幅 40 ㎝前後、長さ 90 ㎝以上、厚さ９㎝前後の板石で、四隅に方形の孔があけてあります。側面は平らになるようにチョウナで仕上げています。これには、表面の仕上げの程度によって二つのタイプがあり、一つはチョウナで平滑に仕上げたもの（第 15 図）、もう一つはツルハシで平らに仕上げたものです（第 16 図）。どちらのタイプも裏側は荒いツルハシの跡が残り、凹凸しています。

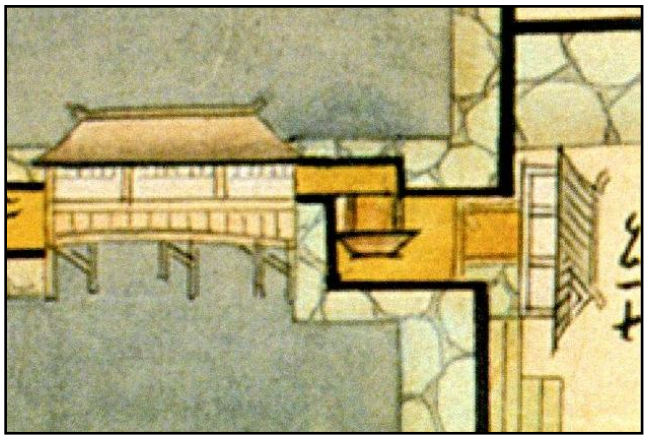
明治初めころの福井城本丸の写真には、石垣上の塀の腰板として、このような構造のものが写っており、実物の発見が待たれていました。表面をチョウナで仕上げた腰板石は、Ｇ面の石垣に組み込まれており、築城当初から石製腰板が使われていたようです。

第１図　調査区の位置

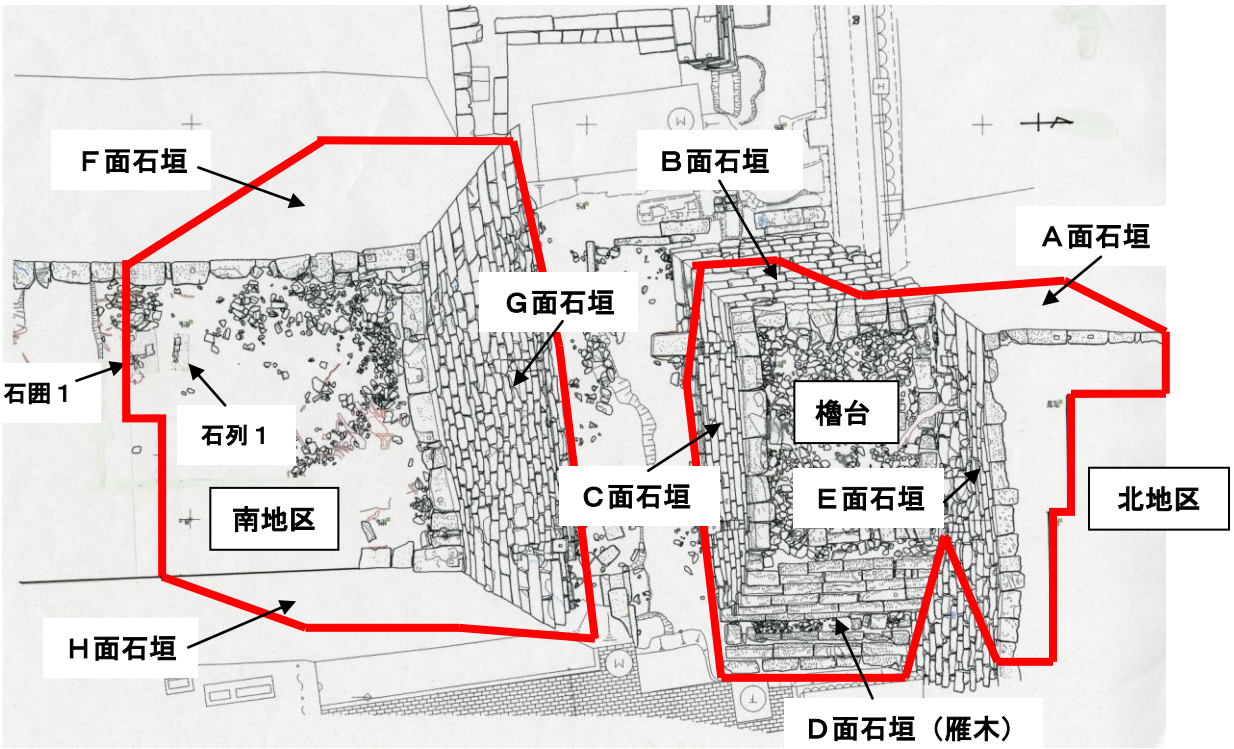
第２図　調査範囲



第３図　「福井城本丸御建物図」『松平文庫』



第４図　「御城下之図」正徳４年（1714）



第５図　調査区上面平面図（縮尺１/200・赤線囲みが解体範囲）

第６図　石囲１・石列１（南地区南縁部）

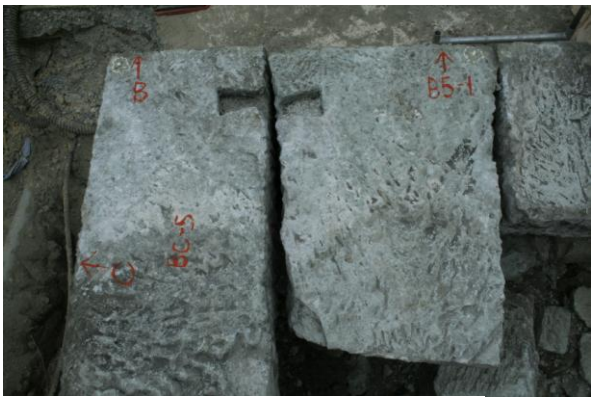
第７図　ホゾ穴のある石材
（横倒しに設置・北地区Ｅ面石垣）

第８図　石垣上面のホゾ穴（南地区Ｇ面石垣）

第９図　大型の裏込石（南地区石垣東北隅）

第 10 図　南地区の東西方向の土層断面

第 11 図　熱を受けた石材（櫓台）

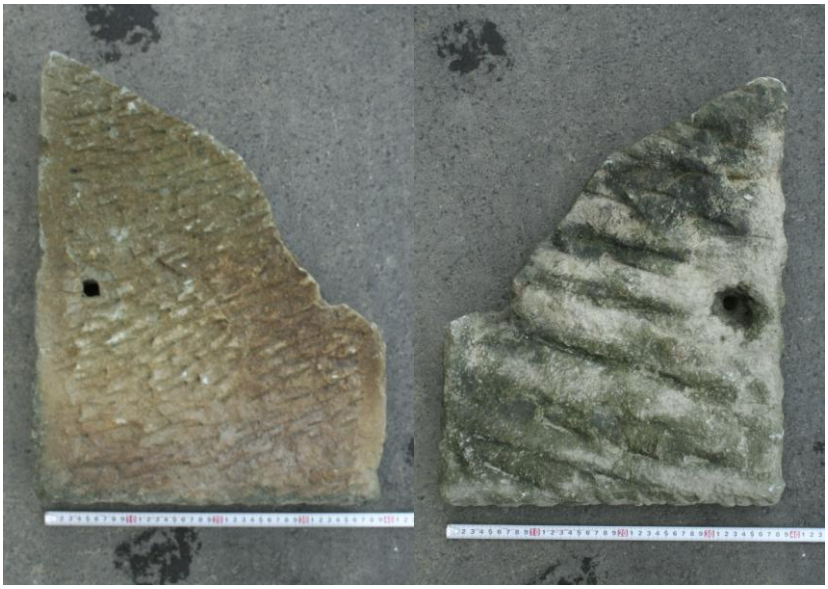


第 12 図　石材をつなぐ加工（櫓台）

第 13 図　大型の裏込石
（櫓台・積み直し前の礎石？）

第 14 図　石垣の線刻（南地区Ｆ面石垣）

第 15 図　塀の腰板石
（チョウナ仕上・表面）



第 16 図　塀の腰板石（ツルハシ仕上げ・左：表面、右：裏面）